

発行日 2007年10月9日 編集 広報委員会

発行 日本パーソナリティ心理学会(旧・日本性格心理学会)

事務局 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-4-19 (株)国際文献印刷社内

電話 03-5389-6243 FAX 03-3368-2822 URL: <http://www.soc.nii.ac.jp/jspp>

【巻頭言】

心理尺度はサイエンスか

村上宣寛(富山大学人間発達科学部)

サイエンス(science)は、「知識」、「学問」、「科学」という意味である。scienceの語源は、ラテン語の *scientia* (知識)で、その起源はギリシャ語の *skhizein* (分割する)である。つまり、サイエンス(知識)は、分割という認識能力から生まれる。分割すると、数えられる。名義尺度の誕生である。サイエンスのもう一つの条件は、検証可能性である。サイエンスでは、何らかの方法で、ある人の知識が別の人によって検証される必要がある。もし、検証不能であれば、それは知識ではない。なぜなら、知識=サイエンスであるから。

心理尺度はサイエンスだろうか。さまざまな心理尺度が作成され、複雑な統計解析が適用されている。サイエンスの必要条件である計量や測定は満たしている。しかし、もう一つの条件は少し怪しい。心理尺度の信頼性が低いと、測定値は不安定で、妥当性も低くなる。研究する度に違う結果になると問題である。「パーソナリティ研究」に掲載された尺度も玉石混交である。残念ながら研究者の妥当性や信頼性の概念も時代遅れで、混乱している。

心理テスト関係では、ロールシャッハ、MMPI、ビッグファイブと関わった。その関係で『臨床心理アセスメントハンドブック』(北大路書房,2004年)を書いてWAIS-Rも勉強した。『心理テストはウソでした』(日経BP,2005年)も書いた。色々、本を書くついでに、心理テスト関

係を一通り勉強した。『心理尺度のつくり方』(北大路書房,2006年)を書く準備が整っていた。妥当性の高い心理尺度を作るには、妥当性の高い質問項目を集めればよい。この点は自明である。では、具体的にはどうすればよいのか。意外にアメリカのアセスメントの専門書にも書いていない。なぜか。これを書くと、尺度作りが途端に大変になるからである。

ウェクスラは、教師や将校の知能評定と相関の高い項目を陸軍やから収集して知能検査を作成した。ハサウェイとマキンリは、特定の精神疾患を基準群、正常者を統制群として、弁別力の優れた項目を収集してMMPIを作成した。論理的質問紙のベック抑うつ検査ですら、改訂時には弁別力の劣る項目を入れ替えた。つまり、歴史に残る妥当性の高い心理テストは、尺度作りの最初の段階で、何らかの妥当性データを収集し、利用している。

そろそろ、足元を見直すべき時期ではないか。因子分析や項目反応理論を利用することを批判しているのではない。いかに複雑な手続きで心理尺度を作っても、予測的妥当性が未知であれば、心理尺度は架空の構成概念にすぎない。心理尺度と現実の関連性を検証し、確実なサイエンスとすべきであろう。

日本パーソナリティ心理学会第 16 回大会報告

大会委員長 帯広畜産大学 渡邊芳之

日本パーソナリティ心理学会第 16 回大会は、去る 8 月 25 日(土)、26 日(日)の 2 日間にわたり、北海道帯広市の帯広畜産大学で開催されました。どの大都市からも遠く、また交通の便も非常に悪い場所での開催にも関わらず 153 名もの会員・非会員に参加の予約をいただき、また多くの当日参加もあって、最終的な大会参加者数は計 167 名を数えました。参加いただいた会員の皆様に心よりお礼を申し上げます。

研究発表はポスター形式で、2 日間に分けて行われました。発表申込数は 80 件あり、初日と 2 日目にそれぞれ 40 件ずつ発表いただきました(発表取りやめが 1 件ありました)。発表者、連名発表者を含めると大会参加者の半分以上が研究発表を行ったこととなります。発表会場がやや狭くご迷惑をおかけしましたが、大変活発な議論が行われていました。

講演は大会企画として 3 件を開催しました。クラーク大学 ヴァルシナー先生には「Personality as a Cultural Construct」の講演だけでなく、シンポジウムにも参加いただきました。富山大学・村上宣寛先生の「心理尺度の作り方」(講演とワークショップ)では若手研究者が作成中の尺度を「ネタ」に盛り上がりました。また、帯広畜産大学・鈴木宏志先生には「盲導犬を科学する」の講演をお願いしました。

シンポジウムは経常的研究交流委員会の企画で「パーソナリティ理解のためのダイナミカルアプローチ」と「若き心理学者たちの模索」の 2 つ、会員企画で「文脈に埋め込まれた時間と共にある経験を捉える枠組み」の合計 3 件が開催され、議論が盛り上がりました。大会 2 日目に開催された「若き心理学者...」ではシンポ終了後に「アフターセッション」を設定したところ、最終便バスが出るまで熱心な議論が続いていました。

大会初日の午前中には各種委員会が開催されました。また、初日の夕方に開催された懇親会には予約参加・当日参加あわせて 90 名もの方に参加いただき、用意した牛の丸焼きやハム、チーズなどを肴に地ビールとワインをお楽しみいただきました。懇親会は私が最も力点を置いて準備したプログラムでもあり、多くの方にお集まりいただき、喜んでいただけたことは思い出に残ると思います。大会に参加いただいた皆様に改めてお礼を申し上げて、大会の報告とさせていただきます。

大会発表論文集に少し残部がございます。ご希望の方には 5000 円(送料込)でお分けできますので、渡邊 (ynabe@obihiro.ac.jp) まで連絡いただけますと幸いです。

ミニ特集 パーソナリティ尺度の構成(秘話)*****

今回の「ミニ特集」は、「パーソナリティ尺度の構成(秘話)」と題して、本学会サイトの「心理尺度の広場」に投稿していただいた方に、尺度作成時の苦労話や裏話、こんな人達に使ってほしいといったアピールなどについて書いていただきました。

KiSS-18 あれこれ

菊池章夫(尚絅学院大学総合人間科学部)

キクチさんが作った社会的スキルの尺度なので KiSS-18 という名前をつけたのが 20 年前だが、そのこともあって驚くほど多くの研究者に愛用されてきた。この学会の機関誌の最近号にも、この尺度を使った論文が 3 つ載っているといった具合である。でもそこから、いろいろなことが出てきたのでその「あれこれ」を話したい。

まず困ったのは、KiSS-18 という正式名称(と当人は思っているのだが)がそのままに使ってもらえなかったことだ。「菊池の社会的スキル尺度」などと書いてある時期がかなりの間つづいた。そのたびに手紙を出して、「KiSS-18 が正式の名称で」とやってるうちに、ここ 10 年ほどはそういうことも少なくなったが、KiSS-とか Kiss-とかいう書き方はいまでも時々折見かける。ぜひ KiSS-18 にしてもらいたい。

この尺度のもとになったのは、臨床心理学者のゴールドスタインたちの「若者のための社会的スキルのリスト」である(こういうリストがあるわけではなくて、ゴ氏たちの本からぼくが抜書きした)しかしこの国の心理学者の多くは、こういう場合にはゴ氏たちの作ったもとの尺度があると思うらしい。近刊のある本(その著者の博士論文をもとにした力作)にも「ゴールドスタインの尺度をもとに菊池が作成した」と書いてある。いまでも 1 年に一回くらいは「ゴ氏の尺度の原版を送れ」

というメールがぼくのところに届く始末である。KiSS-18 の項目を書いたのはぼくです、間違わないでください。

この尺度には韓国語版と中国語版とがあり、特に後者の版(いくつかの訳があるらしい)は盛大に使われているようだ。まことにめでたいが、アメリカのゴ氏たちのリストが日本で KiSS-18 になり、それが西の国ぐにで使われるというのでは、まるで「ゴールドスタイン西へ行く」ではないか。もしかして、この中国語版をもとにしたモンゴル語版やトルキスタン語版ができたりしたら、どうなるのだろうか。現に日本のある研究者を介して、フィンランドだったかの研究者から KiSS-18 の英語版(!?)はないのかという問い合わせがあったくらいである。

ふざけたことばかり言ってるようだが、マジメなことはこの 1 月に出した『社会的スキルを測る: KiSS-18 ハンドブック』(川島書店)に書いてある。この 20 年の間に、この尺度を使った 150 篇を超える論文や学会発表がある。その多くは他の尺度(考えられるほとんどの尺度)との相関的なデータだが、最近では実験的な研究でもこの尺度が使われ始めている。その分野は性格や社会だけでなく、産業や教育、臨床や看護教育などの心理学とその隣接領域に及んでいる。こうして KiSS-18 は、ほとんど作成者のぼくの手を離れて、あちこちで元気に飛びまわっているようだ。

岡田 涼（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）

今回、「パーソナリティ尺度の構成」というお題をいただき、尺度を作るうえでの苦労話や裏話を書いてほしいということでした。「実は、私が作成した尺度の項目はすべて回文になっています」などという気の利いたネタもないので、ここでは尺度を作った時の愚にもつかない感想を少し書かせていただこうと思います。

修士論文のテーマとして、私は友人関係の形成や維持を動機づけの観点から捉えたいと思い、そのための尺度を作ることにしました。尺度を作るにあたって何に気をつけるべきか？う～んと悩んだ末、項目数が多くなり過ぎないことが大事だと思いました。というのは、自分が質問紙に回答した時、「質問が多くて答えるのが大変だなあ」と感じたことが何度もあったからです。「項目数を多くしすぎないこと」を犯すべからざる至上命題として、尺度作成を進めることにしました。

具体的に項目を作る段になって、まず考えたのは概念の幅です。動機づけという概念自体が幅広いもので、それを友人関係に適用しようとするとき非常に多様な側面をもったものになります。それらの側面を余すところなく捉えられるようにと、次々に項目を作っていました。しかし、途中で「ちょっと待てよ」と思い、作った項目を数えてみるとかなりの量…。「これは回答する人が途中でやめてしまうかもしれないな」と考え、断腸の思いで項目を減らしました。次に考えたのは信頼性のことです。理論上4つの下位尺度を想

定していましたが、それぞれの下位尺度にある程度の信頼性をもたせるためにはこれぐらい必要だろうと、項目を並べていきました。並んだ項目リストを見てみると、やっぱりまだ多い…。馬鹿を斬るつもりで泣きながら項目を削りました。何とか項目を選択し、妥当性を検討するための尺度を探すことにしました。理論的に関連がありそうな尺度をあれもこれもと拾っていきました。すると案の定…。「これでは無事最後まで辿り着ける回答者はいないだろうな」と思い、質問紙ごとに載せる尺度を変えることで何とか対処しました。

まさしく二律背反でした。妥当性や信頼性を高めようすると項目数は多い方がよいのですが、多すぎると回答者に負担を強いすぎてしまい、ちゃんとした回答が得られない可能性があります。もちろん最初からあまり項目を絞り過ぎない方がよいという意見もあると思います。しかし、最後の方の項目が答えられていなかったり、すべて同じ数字がついている質問紙をよく見かけるのも事実です。協力してくれる人が無理なく自然に回答できる分量を考えることは、とても大切なことだと思います。「あれも訊きたい、これも訊きたい」という気持ちをぐっとこらえることが、よい尺度を作ることにつながるのではないかと考えています。と言いながらも、自分ではなかなかよい尺度を作れないのですが…。

現場で使える尺度を目指して

金山元春（高知大学教育学部）

このたび、「パーソナリティ研究」に発表した論文「幼児の問題行動の個人差を測定するための保育者評定尺度の開発」は、宮崎大学心理学教室の「社会的スキル訓練研究会」との共同研究から生まれたものです。

研究会の名称からも明らかなように、われわれの関心は、子どもの社会的適応の援助にあります。最近では、社会的適応に問題を抱える子どもへの援助技法として開発された「社会的スキル“訓練”」のみでなく、教育的見地から、学級や学校に所属するすべての子どもに社会的スキルの学習機会を計画的に提供するために開発された「社会的スキル“教育”」に関する実践的研究を進めています。これまでに、保育所、幼稚園、小学校、中学校での実践を試みてきました。

実践活動においては、社会的適応に問題を抱える子どもをスクリーニングしたり、個々の子どもの状態像をアセスメントしたりするための測定具が欠かせません。海外では子どもの問題行動を測定するための道具が豊富に開発されていますが、日本においては不足しているのが現状です。そこで、われわれは、海外で定評のある尺度を参考にしながらも、日本の保育現場、教育現場で使える尺度を開発しようと研究を進めてきました。

宮崎大学の「社会的スキル訓練研究会」は1984年に発足しました。継続的な活動の成果から、現在では地域の保育現場、教育現場との間に親密なネットワークが形成されており、研究活動に現場の声を反映できるのが強みです。尺度項目の作成に際しては、現場の先生方のご意見をいただくこともできます。また、「実用性」にかかわるご指摘をいただくこともあります。現場の先生方が気にされるのはやはり「実施時間と労力」にかかわることのようです。単純に、項目数が多いものは、多忙な保育現場、教育現場にとっては有用な尺度とはいえないでしょう。このたびの幼児用問題行動尺度の開発は、この研究会の二十数年にわたる活動を土台として実現されたことを記しておきたいと思います。

最後に、私事ですが、今年の4月から大学に職を得て研究者としての一步を踏み出しました。まずは土台づくりをと思い、宮崎大学グループにならい、現場とのネットワークを少しずつ紡ぎ始めているところです。その成果として「現場で使える尺度」が開発できましたら、またみなさまにご紹介させていただきます。

対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデル尺度短縮版 (TSNS-S) について

日本学術振興会特別研究員 (広島国際大学) 清水健司

皆様、こんにちは！この度はTSNS-Sを紹介できる機会を頂きまして恐縮に思います。

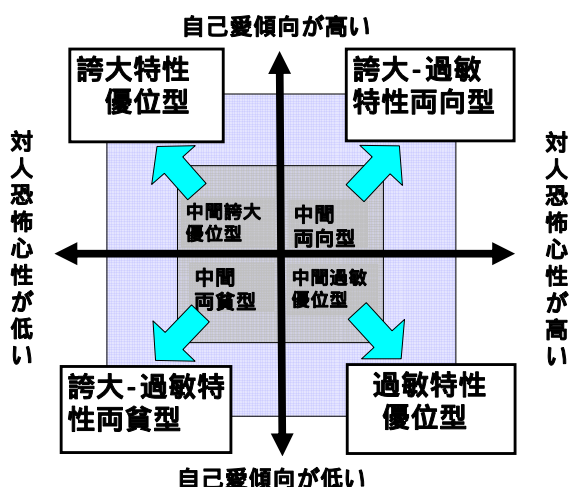
私の研究は、清水・海塚 (2002, 教心研) に始まり、清水他 (2007, 心研) で対人恐怖心性-自己愛傾向 2次元モデル作成に至っています (Figure1)。そして、表題のTSNS-S (清水他, 2006, パ研) は、モデルの5類型を簡便に分類するための尺度になります。

ただ、TSNS-S作成に関する私の役割そのものは微々たるもので、項目は堀井俊章先生、小塩真司先生の尺度から抜粋する形となっており、ほとんどは両先生の業績におんぶに抱っこであるものと理解しています。

では、ここで少しTSNS-S作成の経緯に触れてみます。モデルの5類型中、私が特に着目するのは、共に強い対人恐怖心性を持つ過敏特性優位型と誇大-過敏特性両向型です。そもそも、この研究の発端は学部生時代に出会った、この2類型を思わせる人々に感じた異なる印象からでした。

それは、過敏特性優位型のように、視線や恥に敏感で、とにかく自信がなく対人関係を耐え忍ぶ人に持った印象と、誇大-過敏特性両向型のように、激しい人見知りをするのに、裏では信じられないほど偉そうな物言いをする変に頑固な人に持った印象の違いです。

同類項に対人緊張の強さを持つはずの“アノ人”と“コノ人”から漂うモノは、一見同じようですが、よくよく見れば大きな開きがあることに素朴な疑問を持ちました。もちろん、これ



は一般大学生に限ったことではなく、臨床現場でも例外ではないように思います。

彼らは各々独特の“生きにくさ”を持ち、結果的に強い自己否定感に苛まれながらも、彼らなりの努力の延長線上で生活しています。私は、何故に彼らが計らずも自分の首を絞めてしまうのかに興味を持ち、そこに研究の臨床的意義を置いてきました。一体何が問題で、どうしたら少しでも楽に生きられるのだろうか？と…。

その知を得るためには、先の2類型を含めた5類型特性の詳細な検討が今後の課題であり、TSNS-Sはその出発点に立つための尺度であるとも言えます。

もちろん、これは私自身の研究課題ではありますが、もし上述の作成経緯を含めて、どなたかに使用して頂けるならば、作成者として自分の研究を受容された感覚にて大変嬉しく思います。